

QR Newsletter

第四紀通信

Vol.1 No.4, 1994



中井町中央公園建設現場でのTPの観察

Vol.1 No.4

October 15, 1994

学会論文賞の創設について -----2	集会の案内 ----- 9
研連公開シンポジウムについて ---3	集会の報告 -----11
巡検報告 -----4	関連学会の動き -----12
SCOR WG100報告 -----5	第四紀研究連絡委員会から -13
IGBP PAGESの最近の動き -----6	評議員会および総会議事録 -16

第四紀学会論文賞の創設について

最近、本学会にも学会賞を作ってほしいという要望が数多く寄せられているため、評議員会と幹事会では昨年の大会終了以降、本会創立40周年を契機とする学会賞の創設にむけて検討を重ねて来ました。本年1月に開催された93年度第2回評議員会では、学会賞の種類、性格、受賞者の選考方法をどのようにするかなどについて様々な意見が出されました。幹事会では評議員会での議論を踏まえ、受賞機会の均等を確保すると共に、学会活動の根幹である会誌への投稿を奨励するため、まず「論文賞」の制定をめざすことにし、5月に学会賞規定と内規の原案を作成しました。その後、評議員から意見を求めて原案の修正を行い、8月26日に開催された94年度第1回評議員会で学会賞規定案と内規案を決定しました。そして、翌27日に開かれた1994年度総会において学会賞規定案と内規案が一部修正のうえ承認され、ここに第四紀学会論文賞が創設されました。

選考対象には原著論文のほか短報、総説、特集号の論文も含まれ、2年間にわたって審査対象となります。また、会員が受賞候補論文を選考委員会に推薦（自薦を含む）することもできますので、これを機会に「第四紀研究」への投稿がますます増えることを期待します。（企画担当幹事）

日本第四紀学会 学会賞規定

(目的)

第1条 本規定は日本第四紀学会会則第3条3項に基づき、第四紀学の発展に貢献する優れた研究業績をあげた会員の表彰に係わる事項を定める。

(賞の名称)

第2条 本学会に日本第四紀学会論文賞を設ける。

(授賞の対象)

第3条 日本第四紀学会論文賞は、会誌「第四紀研究」に第四紀学の発展、進歩に貢献する優れた論文を発表した著者に授与する。

(受賞者の選考)

第4条 日本第四紀学会論文賞受賞候補者を選考するため、論文賞受賞候補者選考委員会（以下「選考委員会」と略称する）をおく。

第5条 選考委員会は、会長が推薦し、評議員会が承認した5名の論文賞選考委員（以下「選考委員」と略称する）で構成し、選考委員の互選により選考委員長をおく。選考委員の任期は1年とし、連続して2期を超えて選考委員に就任することはできない。

第6条 本学会会員は、選考委員会に対して日本第四紀学会論文賞受賞候補者を推薦することができる。

第7条 選考委員会は毎年6月30日までに選考を終了し、受賞者を決定する。選考委員会は必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。

(受賞者の発表)

第8条 選考委員長は評議員会及び総会において選考経過と結果を報告する。

(授賞式)

第9条 授賞式は総会で行い、賞状及び副賞（賞金）を授与する。

(その他)

第10条 本規定に定めるもののほか、学会賞に係わる必要事項は内規として評議員会が別に定める。

(規定の変更)

第11条 本規定の変更には評議員会の承認を必要とする。

(規定の施行)

第12条 本規定は1994年8月27日から施行する。

日本第四紀学会論文賞選考に関する内規

1. 選考の対象とする論文は、授与年の前々年及び前年の2年間（2巻分）の第四紀研究に発表された原著論文、短報、総説、及び特集号の論文とする。
2. 論文賞の授与は原則として毎年とし、受賞論文数は2編程度とする。
3. 受賞論文が複数の会員（研究グループ等を含む）により執筆されたものである場合には、執筆者一同に論文賞を授与する。また、非会員を共著者を含む論文及び編集委員会の依頼により非会員が執筆した論文も、会員が執筆した論文に準じて論文賞の選考対象とする。
4. 選考委員は授与年の前年の第2回評議員会で承認を得る。
5. 選考委員が受賞候補者となった場合には、賞の選考に関与しないこととする。
6. 選考委員に欠員が生じた場合は、会長が委員の構成を考慮して後任の委員を指名する。
7. 受賞候補者の推薦書類は、授与年の3月末日までに日本第四紀学会論文賞選考委員会宛てに提出する。
8. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。推薦者名（自薦を含む）、受賞候補者名、受賞候補論文名（巻号頁を含む）及び推薦理由。
9. 会長は第四紀通信に論文賞受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。
10. 選考委員長は第四紀通信に受賞者と授賞理由を発表する。

研連公開シンポジウム

日本列島における海岸環境の変遷 — 第四紀後半から現在まで —

日時 1994年11月25日（金）9:30-17:30

場所 日本学術会議講堂（東京都港区六本木7-22-34）（地下鉄千代田線「乃木坂駅」下車、徒歩1分）

主催 日本学術会議第四紀研究連絡委員会、日本第四紀学会

後援 日本学術会議地理学研究連絡委員会、同考古学研究連絡委員会、同地質学研究連絡委員会、

日本地理学会、日本考古学協会、日本地形学連合、東京地学協会、日本地質学会、日本応用地質学会

プログラム

9:30 開会の辞 日本学術会議第四紀研究連絡委員会委員長

〈完新世における海岸環境の変遷〉

司会：小池一之（駒澤大学）

9:40 海津正倫（名古屋大学）：沖積低地における海岸環境の変遷

10:10 松島義章（神奈川県立博物館）：完新世における日本列島沿岸域の海況変遷

10:40 茅根 創（地質調査所）：後氷期におけるサンゴ礁の形成過程

11:10 工楽善道（奈良国立文化財研究所）：弥生期における海岸平野の開発

11:40 辻 誠一郎（大阪市立大学）：縄文時代以降の海岸平野の植生変遷と人類の活動

12:10~13:10 昼休み

〈更新世後期における海岸環境の変遷〉

司会：米倉伸之（東京大学）

13:10 大場忠道（北海道大学）：日本列島周辺における海流変遷

— 深海底コアの分析結果から見た過去6万年間の地理的変遷

13:40 太田陽子（専修大学）：最終間氷期の海岸線の復元とその地域性

14:10 大村明雄（金沢大学）：琉球列島におけるサンゴ礁段丘の形成と海面変化

14:40~15:00 休憩

〈歴史時代以降の海岸環境の変遷〉

司会：遠藤邦彦（日本大学）

15:00 貞方 昇（北海道教育大学函館校）：歴史時代における人類活動と海岸平野の形成（かん）流しを中心に

15:30 砂村継夫（筑波大学）：自然海岸における地形変化過程と種々の土木工事に伴う環境変化

16:00 小池一之（駒澤大学）：日本列島における海岸環境の変遷—人間活動に伴う最近から未来への変化—

16:20 米倉伸之（東京大学）：今後の海岸環境研究の課題—IGBP・LOICZに関連して—

16:40 総合討論

司会：米倉伸之、遠藤邦彦、小池一之

17:30 閉会の辞 日本第四紀学会会長

実行委員会 小池一之（委員長）、太田陽子（第四紀研連）、斉藤享治（第四紀学会）

連絡先：小池一之

（〒154 東京都世田谷区駒沢1-23-1、駒澤大学文学部地理学教室03-3418-9267(直)、03-3418-9259(代表)

『伊豆半島北端部プレート衝突域の第四紀地史』に参加して

野村亮太郎（神戸大学）

今年度の学会巡検は伊豆半島の衝突域として数多くの成果が上げられている大磯丘陵～富士山南西麓において行なわれた。観察点は予定の12の他に現地で追加があった。それらはプレートの運動に伴う地殻変動と関係が深い第四系、堆積物編年の鍵となる火山灰層に焦点化されていた。期日は8月29～30日、移動は大型バスによる、暑いが晴天に恵まれた巡検であった。

8月29日、東急東町田駅前を出発、まず、中井町中央公園建設現場を訪れた。ここは箱根火山から約15kmの位置にあり、数多くの箱根起源のテフラが観察される。まず東京軽石（TP）を観察した。通常、TPは風化していることが多いとのことであるが、ここではTP上面が火砕流によって被覆されたために新鮮な状態で保存されていた。続いて、大磯丘陵の海成段丘群を遠望した。あいにく、霞のため遠方の視界は不十分でStage 5eの千畳敷山はほとんど見えなかったが、Stage 5a、7の吾妻山、鷹取山は傾動している地形が観察できた。これは傾斜した海岸段丘であり、旧汀線位置を考慮すると、その隆起量はかなり大きいということであった。残土処分場ではStage 8・7の砂泥互層と狭在される火山灰層を観察し、吾妻山では5a以降の隆起量を体感し、段丘堆積物とそれを覆うテフラ群を観察した。

大磯丘陵には厚い更新統がある。そのうち、曾我山層は曾我山丘陵の西部でほぼ南北の褶曲構造を示し、その南端では東西方向に変ると言うことであった。層厚と対比された火山灰により、この地域が中期更新世に沈降域から隆起域に転じたことが明らかにされている。その下位の田島層を国府津・松田断層崖付近で観察した。古地磁気によれば曾我山層は回転していないが、田島層は東に20°ほど回転しているとのことであった。

駿河小山では鮎沢川河床の火砕流堆積物と駿河礫層を観察した。焼け焦げた材を含む火砕流堆積物・降下火山灰層・泥炭層などが傾斜して見られた。この火砕流は給源が露頭から少し南東よりに推定されており、時代ならびに広域テフラに関して討論された。また、駿河礫層は扇状地性の段丘礫層であるが、Pm-Iなど広域テフラにより、旧来の年代観が一新された事情の説明があった。その後、宝永スコリアの厚く堆積した地域を、宝永噴火の社会的影響が深刻であったことなどの説明の中、宿舎に向かった。

30日は最初に富士降下スコリアに挟まれたATの

露頭と宝永噴火の降下堆積物および当時の焔跡を観察した。その後、富士の側火山を観察しながら、富士山南西麓に移動し、更新統を観察した。

富士山南西麓では羽鮎丘陵の第四系列所礫層とそれを覆う古富士泥流を観察した。両者は明瞭な不整合関係にあり、中期更新統が欠如していると言う。また、別所礫層は層厚が数100mあり、その点からこの地域は陸に近い沈降域であったことが説明された。続いて、富士川河床に降り、逆帯磁している安山岩上位の堆積物を観察した。ここでは、2枚の火山灰層と大型植物化石をみた。その後、古富士泥流堆積面の示す地形の変位を観察しつつ岩木山に移動し、昼食をとった。

ついで、蒲原丘陵で鷺の田礫層を観察した。これは房総半島の火山灰と対比される火山灰によって、海進時（Stage 15, 17?）のものと考えられている。また、安山岩とその上位の礫層が反時計回りに回転する帯磁を示しているとのことであった。これは第1日に見た時計回りの回転と位置の上でも対をなしており、伊豆半島の接近・衝突のモデルが示された。

最後に富士川河床に露出する薄い富士山起源の溶岩を観察し、それが14kaのものであること、富士川左岸では地表下約100mに分布していることから、過去1.4万年間の運動量が推定された。この断層はプレートの沈み込みに伴い発生する巨大地震時に運動すると見られることから、この断層は過去や将来の東海地震とも関係が深いことが紹介された。午後4時過ぎに富士駅で解散した。

以上、今回の巡検は伊豆半島衝突現場の地史という課題をテフラとの関係において焦点化したものであった。そのためか、募集人員を上回る希望者があり、増員処置をとって頂いた。今回の巡検地域は近い将来起るであろうといわれる東海地震との関係が深いところであり、積み上げられた第四紀の研究結果が未来を予測する上でどう役立つのか注目されると思われる。また、第四系の対比にテフラは鍵層として重要である。参加者の多くが採取した火山灰は広域テフラと考えられるので、各研究室での分析・対比案が注目されよう。ただ、今回みせて頂いたいくつかの露頭は短命であると思われるのが残念である。最後に、草を刈り、あるいは、夏草が生い茂るなか、草を踏み分け案内していただいた山崎晴雄・町田洋・水野清秀の各先生、様々のお世話を頂いた都立大学の関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

SCOR WG100 報告

大場忠道（北海道大学大学院地球環境科学研究科）

この度、SCOR WG100の第2回会合が開催されましたので、これまでの経過をご報告申し上げます。1992年9月のSCOR総会において、[Sediment Coring for International Global Change Research、地球規模環境変化の国際的研究のための堆積物コア採取]というWorking Group 100が発足されました。

このWG100の主な任務は次の4つからなります。

1. 任務

○IGPBのPAGESやJGOFSで要求されているように、近い過去の海洋古環境の研究に適した海底コアを全海洋から採集するための国際的努力を調整すること。

○これらのコアの記載・保管・分割・特別な分析に試料を分配する際の指針について助言すること。

○新たに採取するコアと既存コアの国際的な有効利用を促進するためにデータベースを作成すること。

○海底コアの未破壊による高精度分析を行う機器の使用を促進させること。

2. 委員

委員長 Pisias, N. (USA)

委員 Carter, L. (NZ)、Carter, R. (Australia)、Curry, W. B. (USA)、Jansen, E. (Norway)、Labeyrie, L. (France)、Mayer, L. (Canada)、Oba, T. (Japan)、Pedersen, T. (Canada)、Shackleton, N. (UK)、Wang Pinxian (China)、Wefer, G. (Germany)

対応委員 Backman, J. (SWE)、Fairbanks, R. (USA)、Mix, A. (USA)、Nelson, C. (NZ)、Thiede, J. (Germany)、van Weering, Tj. (NETH)、Weaver, P. (UK)

3. 位置付け

IMAGESは、SCOR WG100を積極的に推進する組織であり、PAGESの海域研究を国際協力の下で行う組織でもある。PAGESの第2期に過去数十万年までの古海洋研究をグローバルな観点から国際的に発展させることを目指している。

4. IMAGES研究の必要性

近い未来の地球環境を予測するために、近い過去の海洋環境の変化をグローバルな観点から理解する必要がある。特に、次の2つの基本的な問題を解決することが重要である。

a. 過去30万年の大気CO₂濃度の変化に対して、海洋の循環や化学的変化および生物活動がいかに関わっていたか？

b. 過去の気候変化に、海洋の深層や表層の熱輸送がいかに関わっていたか？

■ 第1回SCOR WG100会合

日時：1993年12月4日(土)～5日(日) 9:30～17:00

場所：San Francisco 州立大学、Thornton Hall

出席者：Pisias, N., Carter, R., Curry, B., Labeyrie, L., Meyer, L., Oba, T., Shackleton, N., Thiede, J. and Wang, P.

〈報告〉

PAGESとIMAGESの相違点

PAGESの海域研究：過去15万年前までの海洋環境の研究を各国独自で行う。

IMAGES：過去数十万年前までの海洋環境の研究を大口径コアを用いて国際協力の下で行う。

〈議題〉

1. 各国の古海洋研究の現状

例) 日本のPAGES対応：西赤道太平洋域と黒潮域に焦点を絞り、約20名の研究者による学際的総合研究を実施している。また、地質調査所を中心とした研究グループも、主に北西太平洋から系統的な海底コアの採取を行っており、独自の研究を進めている。これまでの海底コアの採取は、主に白鳳丸（コアラ-8 mm x 10 m）と白嶺丸（コアラ-12 mm x 6 m）によって行われてきた。既存コアの集積状況と保管状態：東京大学海洋研究所と地質調査所にそれぞれ約500本、乾燥（一部冷蔵）状態で保管されている。既存コアの国際的利用の可能性と問題点：既存コアでは非常に困難。

2. SCOR WG100の4つの任務（前述）

についての議論。

- a. 海域と計画：各海洋を縦断するような測線を設けて、新たな海底コア（約150本）を採集する。例えば、1995年には大西洋において、フランスの研究船Marion Defuransによるパイロット航海を実施。1996～2000年までに毎年1回の航海を計画。
- b. 海底コアの条件：直径15 cmのピストン・コア、過去30万年前以上達していること、数百年～千年の解像力をもつ速い堆積速度のコア。
- c. コアの処理・分析および保存方法：標準的な指針を定める。
- d. データベースに必要な項目の列挙。
- e. 未破壊分析に必要な項目の列挙。

研究トピックス

3. IMAGESの推進

全海洋から組織的に海底コアを採取し（あるいは、既存コアを使って）、各国で共通基盤に基づく分析を行い、グローバルな観点から古海洋環境の変遷を理解する。そのための戦略として、次の6項目について検討する。

- a. 重要海域の設定。
- b. 学際的分析を行うために大口径コアラーによる採泥。
- c. 高い解像力を得るために速い堆積速度の海域から採泥。
- d. 古海洋を理解する上での指標となる手段の開発。
- e. 堆積物の年代決定。
- f. コア試料やデータの管理。

IMAGES研究を推進するために、Steering Committeeを設けることが望まれる（SCOR WG100は、それが結成されるまでの責任をもつ）。

■第2回SCOR WG100会合

日時：1994年5月21日(土)～22日(日)9:00～17:00

場所：Johns Hopkins 大学 (Baltimore)、Olin Hall

出席者：Pisias, N., Carter, L., Carter, R., Curry, B., Jansen, E., Labeyrie, L., Meyer, L., Oba, T., Haq, B. Shackleton, N., Wefer, G., Zahn, R., Lancelot, Y. Gross, E., Zimmerman, H., Briden J., Sancetta, C.

〈報告〉

前回までの経緯と前回の草稿の検討。

〈議題〉

1. 重要海域の設定と研究テーマ

(5班に分かれて議論)

海洋が関連するグローバルな問題として、炭酸

ガス・熱輸送・生物生産量大陸-海洋間の対比のそれぞれについて、太平洋・大西洋・インド洋・南極海・その他の海域から重要な海域をそれぞれ設定。

各海域から水深の異なる海底コアを採取し、全海洋の古環境変遷を4次元（時間も含む）的に復元する。

分析項目や試料分配の指針を検討。

2. IMAGES Steering Committeeの役割。

- a. IMAGES計画の立案と遂行。
- b. 既にスタートしている研究へのIMAGES方針への勧誘。
- c. IMAGES航海計画。
- d. 研究成果の公表。
- e. 計画に対する毎年の評価。

3. 財政的支援

a. IMAGES Steering Committeeの設置に伴う経費を必要とする。

b. 北西太平洋へフランスの研究船 Marion Defranse（直径：15 cm、長さ：50 mのピストン・コア採取可能）を呼ぶ際に、経費を必要とする可能性が高い。

以上のように、SCOR WG100の2回の会合において、各国では今後IMAGES Steering Committeeを設置して、古海洋の研究をより積極的に推進しようとする意気込みが強く感じられます。わが国においても、各研究者が研究内容の質の向上に努めると同時に、研究組織を強めて学際的な総合研究に取り組むことが重要と考えられます。また、わが国においても独自に大口径のピストン・コアラーによる採泥が可能な研究船の改良あるいは新造船の建設が望まれます。

IGBP-PAGESの最近の動き

IGBP - PAGES小委員会が5月20日午前11時～午後2時の間、学術会議第6部会議室にて行われた。松本英二（小委員会委員長）、吉野正敏（IGBP専門委員会委員長）、井内美郎（幹事）、遠藤邦彦（幹事）、三上岳彦（幹事）、小野有五委員、藤原健蔵委員、漆原和子委員、吉村稔委員、米倉伸之氏（LOICZ）が出席した。この会合の報告を中心にいくつかの情報を紹介する。

1. 最近のPAGESの動き

松本委員長より最近のPAGESの動きが紹介された。1991年のテーマ・プロジェクトの構造はかなり改められた。ここではその後の情報も含めて紹

遠藤邦彦（日本大学）

介する。IGBP-PAGESの1994～1998年にわたる5ヶ年研究計画は、1994年6月にCambellaで開催されたSSCにおいて表1のようにまとめられている。既に走っている、あるいはこれから走り始めるprojectは、5つのFOCUS別に整理された。

Project Organization

FOCUS I Global Paleoclimate and Environmental Variability

PANASH I - Time Stream I(The period since 2000 BP)

Activity 1: PEP-1(The Americas Transect)

Activity 2: PEP-2(Austral-Asian Transect)

Task-1:Lake Baikal Project

- Activity 3: PEP-3(Afro-European Transect)
Task 1: IDEAL
- Activity 4: The Oceans
Task 1: North Atlantic Project
Task 2: Tropical Oceans
- PANASH II - Time Stream II
(The last several hundred thousand years)
- Activity 1: PEP-1(The Americas Transect)
Activity 2: PEP-2(Austral-Asian Transect)
Task-1: Lake Baikal Project
- Activity 3: PEP-3(Afro-European Transect)
Task 1: IDEAL
Task 2: Paleomonsoon(w/INQUA)
- Activity 4: The Oceans
Task 1: IMAGES(w/SCOR)
- FOCUS II Paleoclimate and Environmental
Variability in Polar Regions
- Activity 1: Arctic Programme
Task 1: PALE
Task 2: NAD Task 3: GISP2/GRIP
- Activity 2: Antarctic Programme
Task 1: EPICA, WAIS-Core, etc.
Task 2: ITASE
- FOCUS III Human Interactions in Past Environmental
Changes
- Activity 1: Human impacts on Fluvial Systems
Activity 2: Human Impacts on Terrestrial Ecosystems
Task 1: European Paleoclimate & Man
- FOCUS IV Climate System Sensitivity and Modelling
- Activity 1: Climate Forcing and Feedbacks
Task 1: Volcanic Influences
Task 2: Solar Influences
Task 3: Greenhouse Gases and Aerosol Influences
Task 4: Abrupt Climate Change and Internal
Climate System Dynamics
- Activity 2: Climate Model-Data Intercomparisons
Task 1: PMIP
Task 2: Paleovegetation(w/GCTE/DIS/GAIM)
Task 3: Multi-proxy Mapping
- FOCUS V Cross-Project Analytical and Interpretive
Activities
- Activity 1: Chronological Advances
Activity 2: Development of New Proxies
Activity 3: International Paleo-Data System(w/WDC)
Activity 4: Regional, Educational and Infrastructure
Efforts(w/START/IAI)

2. PEP II 集会報告 (小野委員)

PEPII (Climatic Change from Pole to Pole within the Eastern Hemisphere) において主に扱われる、シベリアー東アジアー南アジアーオセアニアを結ぶ地域の古環境研究の現状を紹介し、今後5年間のPEPIIを如何に立ち上げるかを討議することを目的に4月9日から12日まで北京において開催された。小野委員は招待をうけ出席した。全体の参加者は外国から20人、中国から30人であった。前半のシンポジウムでは、上記各地の研究の状況が発表され、小野委員からは日本のPAGES研究成果が報告された。後半のワークショップでは、3グループに分かれて議論が煮詰められ最後に全体会議が開かれた。その結果は正式にはWasson委員長により取りまとめられ、IGBP事務局から出版されるが、小野委員によるその概略は以下の通り；

(1) PEP II Transectで最も優先すべき研究テーマ PEP II のカバーする地域の特徴は、モンスーン循環があること、北半球の氷床地域から最も遠いこと、ENSOの影響を最も強く受けることである。また多くの島が大陸の縁辺に分布し、それらに囲まれた浅い緑海の果たす役割も重要である。さらにこの地域は長い人間活動の歴史を持ち、その時間的長さや自然へのインパクトの様式は、それぞれの文化や伝統によって異なっている。このような地域の独自性を踏まえてPEPIIでは、(A) 高緯度地域の環境変化が低緯度地域の環境変化とどのようにリンクしているか？それがモンスーン循環に与えた影響や、偏西風循環に与えた影響を明らかにする。→主としてStream 2: 過去130,000年の環境変化

(B) ENSOによる低緯度地域の東西方向の環境変化はどのようにリンクしているか？それはまた、モンスーン循環とどのような関係にあるか？→主としてStream 1= 過去2,000年の環境変化以上2つの問題を優先的に研究する。

(C) 人間活動による影響では、特に情報が不足している東南アジアやオセアニアについて、考古学者や文化人類学者、歴史学者などとの連携のもとに、その影響を評価すべきである。

(2) その研究を行なうためにはどのような技術的問題の解決が必要か？

上記課題の達成のためできるかぎり正確な年代測定と、古環境についてのできる限りの定量化(気温、降水量、それらの季節性)が必要である。極端に言えば定量できないデータは不要で、定量化されたデータを用いてモデリングを行なう。

このため、年代測定技術の向上、特に年代測定

研究トピックス

精度の向上が不可欠で、既存の年代資料も2つ以上の方法によるクロスチェックが必要・→レス、湖底堆積物の正確な年代決定（OSL：Optically Stimulated Luminescenceの開発、TL Tephrochronology）。

また連続試料を得るための簡易ボーリング機械の開発。

凍結しない、小さくて深い溝を掘る技術の開発。Human impactがない地域でのpollen rainの観測ネットワーク。

現在の環境データの蓄積=SST, Salinity, Isotopic composition等。

熱帯雨林でのデンドロクロノロジー等。

(3) 今後のPEPIIの運営はどのようにすべきか？PEPIIの推進のため、PEPII Steering Committeeをつくる。委員長はオーストラリアのR.Wassonと中国のLiu Tungsheng。委員は約10名。委員会は、IGBP本部に対し毎年活動を報告し、ニュースレターをだす。1997年頃までにある程度の成果をだし、次の全体会議を開く。場所はオーストラリアか熱帯地域にしたい。PEPIIのそれぞれの研究計画は個別にたてて進める。3カ国以上の共同研究が望ましい。日本に対する要望として、

(1) PEPIIに対し、オーストラリア、中国、インドと並んで指導的役割を果たしてほしい。

(2) 関係者は速やかにE-Mailを登録し、Internetによる情報の交換をしてほしい。特にコロラドのPaleoenvironment Data Baseへの貢献をすべきである。

質疑

日本列島を含むアジア地域が扱われる研究であるので、日本として積極的に関与、あるいはリードしていく必要があることで一致した。

PEPIIの日本代表を小野委員とすることとし、SCを早くつくるよう働きかける。

今走っている研究グループを国際化する（オーストラリア、中国、台湾等）。

3. 広島国際シンポジウム（藤原委員）国際対応委員会IGBP専門委員会、地理学研究連絡委員会、第四紀研究連絡委員会、考古学研究連絡委員会主催、広島大学総合地議研究資料センター共催の公開学術講演会及び国際シンポジウム「熱帯・亜熱帯モンスーンアジアの古環境変遷」が、広島県民

文化センターにおいて下記の日程で開催された。

平成6年9月4日公開学術講演会

平成6年9月5日国際シンポジウム

平成6年9月6日国際シンポジウム

詳細は改めて報告される予定である。

4. PAGES関連研究の状況

漆原委員：文部省科学研究費による平成4年度、5年度の国際学術研究について、インド（藤原）、タイ（田村）、インドネシア（漆原）、雲南（牧田）、雲南の高所（岩田）等の概要と将来計画について紹介。

井内委員：科学技術庁振興調整費に申請中の、バイカル湖の湖底泥を用いる長期環境変動に関するプロジェクトについて紹介。

米倉氏：LOICZの状況を紹介。小委員会をつくりたい。秋頃に国内シンポジウムをやりたい。

大場委員（小野委員より）：IMAGESの状況を紹介。

徳岡委員（遠藤委員より）：ネパールの湖沼調査等の紹介。

遠藤委員：科技厅「砂漠化機構の解明に関する国際共同研究」によるタクラマカン砂漠の調査、日本大学総合研究「21世紀地球環境と人類の生存」による中国ジュンガル盆地及び太河調査の概要を紹介。

5. 今後のPAGESの進め方

WDCについて

World Data Center (WDC)については、重要なので、IGBPニュース等の記事として掲載する必要がある（三上委員=1993年8月23-25日のPAGES Data Management Workshopに出席）。

小委員会の開催について当面小委員会は広島シンポジウム参加者の間で行う。定期的には、2月と夏とし、さらに必要に応じて随時開催する。PAGES関連国際集会の予定

広島国際シンポジウムに続き、来年度に実施することを検討する（LOICZとジョイントして行なうことも考慮する）。

小委員会経費の財源として、科学研究費総研B等を申請することを検討する。

第9回「大学と科学」公開シンポジウム 古代に挑戦する自然科学

平成7年2月1日（水）～2日（木）

有楽町朝日ホール（東京都千代田区有楽町2-5-1有楽町マリオン11F）

プログラム

2月1日（水）

総合講演（10：10～10：40）古代への挑戦 奈良国立文化財研究所長 田中 琢

古代遺産への挑戦（10：40～12：30）司会 千葉大学文学部教授 加藤晋平

掘らずに遺跡を探る 奈良国立文化財研究所室長 西村 康

藤ノ木古墳の金よみがえる 奈良国立文化財研究所室長 沢田正昭

古代生活への挑戦（13：50～16：30）司会 国立歴史民俗博物館副館長 佐原 真

稲作の起源を求めて 宮崎大学農学部教授 藤原宏志

トイレ考古学のはじまり 奈良国立文化財研究所主任研究官 松井 章

骨から病気を読む 東京都老人総合研究所室長 鈴木隆雄

2月2日（木）

古代手工業への挑戦（10：00～12：30）司会 作陽短期大学教授 馬淵久夫

古代漆の源流 国立歴史民俗学博物館助教授 永鳴正春

古代ガラスの材賞 奈良国立文化財研究所主任研究官 肥塚隆保

古代金工のハイテク 奈良国立文化財研究所主任研究官 村上 隆

古代環境への挑戦（13：50～16：30）司会 明治大学文学部教授 戸沢充則

古代環境を読む 大阪市立自然史博物館学芸課長代理 那須孝悌

珪藻類・昆虫化石からわかること 愛知県立明和高校教諭 森 勇一

骨から食物を読む 北海道大学大学院助教授 南川雅男

聴講費 無料。聴講希望者が多数の場合は抽選となります。

聴講申込 シンポジウム名「古代に挑戦する自然科学」・氏名・〒・住所（自宅か勤務先を明記）
・職業、をハガキにご記入の上、事務局宛にお申込みください。

申込先 クバプロ内「古代に挑戦する自然科学」事務局

〒102千代田区飯田橋4-6-5TH第4ビル4F TEL03-3238-1689

主催 第9回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会

後援 文部省 他

第11回「しんかいシンポジウム」開催のお知らせ

本年度のシンポジウムを下記の要領で行いますので、多数お誘い合わせの上ご参加ください。

開催日時：平成6年12月14日（水）9：30～18：00 15日（木）9：00～18：00

場所：コクヨホール（JR品川駅港南日下車徒歩1分）東京都港区港南1-8-35（TEL03-3450-3712）

参加費：無料

予稿集：当日配布（無料）

主催：海洋科学技術センター 横須賀市夏島町2-15（TEL0468-66-3811）

問い合わせ先：深海研究部 藤岡（内線411）橋本（内線433）

小杉正人記念ワークショップ

『古環境・古生態研究の新しい展開をめざして』

主催：関東平野研究会，日本大学文理学部応用地学教室，応用地学会

後援：日本第四紀学会

於：日本大学文理学部2号館合併教室（〒156東京都世田谷区桜上水3-25-40；京王線下高井戸駅下車）

記念ワークショップ「古環境・古生態研究の新しい展開をめざして」の主旨

これからの古環境復元の研究は如何にあるべきか，古生態研究は如何にあるべきか，第1線でご活躍中の方々に話題提供をお願いし，若手にも報告をしてもらい，自由に夢のある議論をしようというのがこのワークショップの主旨です。まだ本格的には取り組んでいないが，こんな研究が今後重要になるだろう，というような発表も大歓迎です。大いに「夢」を語り合おうではありませんか。

12月10日 13時～17時 小杉正人記念ワークショップ第1部

- 1) 挨拶：萩原幸男（日大文理応用地学科主任）13：00～13：10
- 2) 古環境研究の課題（ワークショップの主旨）：遠藤邦彦（日大）13：10～13：30
- 3) 貝類群集研究の進展：松島義章（神奈川県博）13：30～14：00
- 4) 地磁気と古環境－最新の話－：糸田千鶴（日大）14：00～14：20
- 5) 広域風成塵（レス）研究の進展：溝田智俊（岩手大）14：20～14：50
- 6) 一般発表 15：00～17：00

17時～19時 懇親会

12月11日 10時～16時 小杉正人記念ワークショップ第2部

- 1) 古植物研究の新展開：百原新（千葉大）10：00～10：30
- 2) 花粉学からの話題：清永丈太（東京都）10：30～11：00
- 3) 珪藻研究の最近の話題：（交渉中）11：00～11：30
- 4) 介形虫研究の新しい視点：（交渉中）11：30～12：00
- 5) 有孔虫研究をめぐる最近の話題：長谷川四郎（北大）13：00～13：30
- 6) DNAと第四紀研究：小池裕子（九大）13：30～14：00
- 7) 一般発表 14：00～15：50
- 8) 挨拶：小池一之（駒沢大，関東平野研究会代表）15：50～16：00

教官公募のお知らせ

1. 公募の対象

気候モデリング分野の助手1名

大気海洋大循環モデルを結合し気候モデルを構築、その気候モデルを用いて地球温暖化問題や気候変動・気候予測の研究を意欲的に行う人をこれまでの専門にとらわれず幅広い分野から求めています。

2. 着任時期 決定後、なるべく早い時期

3. 応募資格

(1) 博士の学位を有するもの、また、平成7年3月学位取得見込みのもの、またこれと同等の学識を有するもの。(2) 採用時35才未満のもの

4. 提出書類

- (1) 履歴書（高校入学以降の学歴および職歴）(2) 研究業績リスト
- (3) 主要論文の別刷りまたはコピー、3篇以内
- (4) 他薦の場合は推薦状、自薦の場合は所見を伺うことのできる2～3名の方の氏名と連絡先を明記
- (5) 志望の動機と今後の研究計画（A4版1枚程度）

5. 応募締め切り 平成6年12月27日 必着

6. 書類送付先

〒153 東京都目黒区駒場4-6-1 東京大学気候システム研究センター 研究協力掛 電話 03-5453-3950
応募書類の封筒には「助手応募」と朱書きし、簡易書留で郵送のこと

7. 問い合わせ先

〒153 東京都目黒区駒場4-6-1 東京大学気候システム研究センター 高橋正明 03-5453-3960

博物館見学会報告

齊藤享治（埼玉大学）

兵庫県立「人と自然の博物館」の見学会が、6月12日（日）に催された。大阪駅から福知山線の三田駅まで快速で35分、神戸電鉄に乗り換え7分で行くフラワータウン駅のすぐそばに博物館があり、交通の便はすこぶる良かった。駅をおりたが、博物館がみえない。集合場所のドーム状のエントランスホールは、陸橋のかけになつていて、ようやく発見できた。今度は、博物館本体がみえない。案内された博物館は谷のなかにあり、台地の上にあるエントランスホールから直接は見えにくくなつていた。景観との調和を考えた構造をとつたという。

見学会は、まず博物館の概要の説明から始まった。詳しくは第四紀通信のVol.1, No.2を参照していただきたい。開館は1992年である。高度な研究機能をもつた博物館にするために、姫路工業大学自然・環境科学研究所が博物館に設置され、大学教員の職制が施行されていることが、特徴的である。施設見学では、ふだんはみることのできない収蔵庫に入り、収蔵物の説明もあつた。1年に1回、収蔵庫全体を薰蒸するということが、記憶に残つた。実験室もみだが、X線分析機器、電子顕微鏡など、分析機器も整い、スペースも広く、研究環境はとてよきそうだった。博物館では、珍

しい活動と思われる。野生生物の保護や野外での再生をめざす「ジーンバンク」についても、説明があり、野生植物の種子を発芽力をもたせた状態で保存する実験をしていた温室の見学もあった。

展示会場では、地学関係の解説があつた。山崎断層や高塚山粘土層などの展示物の説明があつた。印象的だつたのは、本館の主要テーマである「人と自然の共生」を考えさせる、人類の繁栄と長鼻類の衰退との関係についてであつた。その象徴として、「アメリカマストドン」を展示しているとのことでもあつた（第四紀通信Vol. 1, No.2写真参照）。最後に情報管理システムの説明があつた。入館者は、情報ブースを利用して情報を引き出すだけでなく、県下の自然を映像で楽しむことかできる。それらを含めた館内の情報機器は、光ファイバーを使つた高速のLANによつて有機的に接続されているという。アゲハチョウを検索して実際に映像にだし、それをおみやげ用にカラー印刷していただいたが、まるで写真のようであつた。

最後になりましたか、見学会では、小林文夫地球科学研究部長、佐藤裕司・加藤茂弘・半田久美子研究員、西井正和情報管理室長にお世話になりました。お礼申し上げます。

第3回第四紀学会テフラ研究会野外巡検に参加して

山崎 哲良（東海大学第四高校）

世後期、特に7万年前後の層序の確立に貢献しているという説明にもまったく同感でした。

また倶多楽火山起源のkt-1、kt-3、kt-6（山崎（1985）のNpfl I・II、Rpfa IIaの一部、Rpfl IIb）がSpfa-2、Spfa-3、Mpfa-3(=OP3)に対比できるとの説明に大変興味を持ちました。しかし、竹浦スコリア層（山崎1991）がkt-2の直下のスコリア層に対比されていること、kt-7、kt-8の存在については疑問を感じています。

また、北海道東部の屈斜路火山噴出物を見学できたことはもう一つの収穫でした。それは、屈斜路火山の大規模火砕流噴火の活動期間が、比較的長すぎる（？）という印象を持っていたからです。これについても試料を採取できましたので、今後検討したいと思います。

最後に、案内者の町田・奥村・山縣先生の準備と献身的な案内に心からお礼を申し上げます。

（紙面の都合で一部省略させていただきました：編集掛）

この見学会（案内者：町田 洋・奥村晃史・山縣耕太郎）の目的は北海道における広域テフラと第四紀地形地質の野外観察を行うことであり、具体的には(1)支笏と倶多楽のテフラおよびそれらの関係、(2)屈斜路カルデラ起源のテフラと他起源の広域テフラとの関係、(3)歴史時代のテフラ、(4)最終間氷期・最終氷期の地層と古環境、(5)火山灰土の成因について現地討論すべく企画されました。

6月26日、10時30分新千歳空港に集合。参加者40名遠く参加された方もおり、多彩な顔ぶれに正直言って私は驚きました。2泊3日の巡検は500kmを走破するハードな予定からなっていました。

今回、特に興味をもって巡検に参加したのはAso-4が全道一円に厚さ10cm程度で分布すること、倶多楽火山噴出物が道東にまでひろく分布することを目で確認したいという思いからでした。Aso-4の観察できる地点では、他のテフラとは違う輝き、太陽光にきらきらと反射していたことが印象的でした。この広域テフラが北海道の第四紀更新

学協会は今後いかにあるべきか

学術の国際化と教育、研究現場の変貌への対応

日本工学会政策委員会

日本学術会議各常置委員会による第15期審議検討の報告集（文部省の学術法人に対する行政施策についての説明）を受けて、第2部パネル討論会「変革期に直面する学協会の行方」が行われ、次のような総括がなされた。

1. パラダイム変化への対応

現在、人類にとって世紀を画する転換期にある。学術は人類の知的資産として共有され、それは応用や技術化を通じて、社会・経済の発展に寄与するものと、認識されるべきものである。そのために国際交流は必須の要件となっている。世界的変革のうねりの中で、わが国は科学技術において、世界の最先端に位置することとなったが、その諸制度は明治以来の欧米先進諸国へのキャッチアップを目指す体制のままであり、抜本的改革が求められる。

2. 科学者・技術者集団としての学協会

個人の創意によって科学技術は進歩する。その集団としての学協会は、未来を担う若者が、科学技術へ夢と情熱と志を持つための社会的環境作りに努力することが求められている。新しい知識の創意と広く次世代の人類へと伝承されて行くべき科学技術活動支援の場としての学協会の立場を認識する必要がある。

3. 学協会の社会的地位

学協会の会員は、科学者のステータスとして認められ、そのサークルとしての学協会の時代から、その知識を国際的に共有し、広く社会に浸透させて社会の発展に役立たせる任務がある時代へと変化して来ている。したがって、学協会は学行に関する非政府機関（NGO）として、科学的見地からの活動と会員のボランティアによる非営利機関として位置づけされる。学協会のこうした地位のために、学協会への社会的優遇措置がはかられるべきである。

4. 学行団体への支援強化

学協会の現状は、国際会議開催への資金、制度的障害、論文誌への財務負担、国際会議代表派遣への個人の過大な負担等、多くの諸問題が存在する。学協会活動は、未来の社会基盤を形成するためのものであり、国民の社会的負担の対象とされるべきである。したがって、税制上の優遇、活動対象によっては国費の配分、公益増進法人対象の拡大、さらには学術法人法（仮称）の制定による

支援が必要である。欧米諸国並の優遇を早急に実現すべきである。

5. NGOとしての学協会活動

国際貢献において、わが国は政府以外のボランティアによるNGO活動への経験に乏しい。したがって、今後NGO活動による社会の安定的発展がますます求められるようになることから、学協会もそれに対応する体制を整える必要もある。こうした問題意識と専門性の高い専従者の育成も重要であり、NGOとしての社会的地位、組織、資金の確保を目指して体制整備をすることが求められる。

6. 学協会と産業界との接近

学協会の会員構成は、電気学会の例では、産業界70%、大学30%、論文発表は大学70%、産業界30%であり、工学系学協会会は、大体こうしたパターンと思われる。社会に対する草の根活動による寄与によって、青少年が科学に関心を持つようになり、社会の人々の理解も進み、会員も増加する。地域における産業界と密着した学協会の支部活動が学協会の社会的地位を強固とするものとなる。また、工学教育協議会活動は、理工学を含めて活動することを望む。

7. 日本学術会議と学協会

日本学術会議は、わが国の内外にわたる科学者の代表機関である。約1,000の学協会（会員数約240万人）から推薦された会員が活動している。その目的とするところは、科学の向上発展を計り行政、産業および国民生活に科学を反映浸透させることである。世論を背景に、長期的、科学的視点で人類社会の福祉に貢献することが使命である。

学協会は推薦する会員を支援し、研究連絡委員会活動を強化して、日本学術会議とより一体感を持った活動をなすべきである。第15期から16期への移行にあたり、以上の論議を踏まえて、次の二つの課題「学術団体活性化」「アジア・太平洋地域学術協力」を特別委員会設置の上、早急に審議し、方策を立案されることを要請する。

日本学術会議第四紀研究連絡委員会報告

■第15期・第8回会議議事録

日時：平成5年12月17日（金）13：30～17：00

会場：日本学術会議第6部会議室

出席者：太田委員長、新藤会員、遠藤、大場、
菊地、熊井、小池、酒井、鎮西の各委員、
及び横尾事務官

議事に先立ち、当日開催の日本学術会議・地質
研連・地質科学総合研連主催のシンポジウム「地
圏システム—地質科学からの展望—」に新藤会員
が出席のため、一部議題の順序を変更した。この
会には大場・熊井・鎮西の各委員も出席した。

1. 前回委員会（第7回）の議事録を承認した。
2. 報告
 - a 日本学術会議関係（新藤会員）
 - a-1 生命科学と社会的問題特別委員会から「生
物遺伝資源レポジトリ及び細胞・DNAレポジト
リ—の整備について」の要望が出され、審議を経
て総会で採択された。
 - a-2 第2常置委員会で検討されてきた「女性科学
研究者の環境改善の緊急性についての提言」（声
明）は各部会等で検討され、さらに委員会で検討
の後、明年5月の総会に提案される予定である。
 - a-3 第16期に向けての研究連絡委員会の見直し
については、第1常置委員会で検討中である。第4
部関係各研連では、会議の回数増、研連の経常経
費、研連の新設等が話題となっている。
 - a-4 学術会議の移転（横浜みなとみらい地区）
に伴う施設整備の基本的な考えを検討するための
ワーキンググループがスタートした。
 - b 地質科学総合研連関係（新藤会員）
 - b-1 学術会議・地質科学総合研連・地質研連主
催のシンポジウム「放射性廃棄物処分—地質科学
からの展望—」が9月3日開催された。
 - b-2 地質科学の普及をはかるため、公開講演会
の開催、啓蒙書の発行等を企画する。
 - c 第四紀研連関係（太田委員長）

前回の委員会以降、本研連主催のシンポジウム
「古地震を探る」（7月9日）、東京地学協会主催
本研連等後援のシンポジウム「太平洋地域の第四
紀地殻変動」（11月12日・13日）ほか、いくつか
の講演会、シンポジウムが開催された。内容は、
前者については古今書院より、また後者について
は地学雑誌特集号として刊行の予定である。
 - d IGBP PAGES関係（遠藤・大場委員）
 - d-1 日本日本学術会議主催IGBPシンポジウム
「日本のIGBP研究の現状と将来」（第3回）が平成6
年2年8日・9日に学術会議講堂において開催され

る。

d-2 PAGES本部よりINQUAのテフロクロノロ
ジー委員会の町田委員長のもとに「気候に与える
爆発的噴火の影響に関する国際集會」開催の依頼
があり、12月1日から4日まで集會と巡検が行われ
た。これには東京地学協会より助成金を得た。

d-3 12月4日・5日にサンフランシスコにおいて
海底コアの有効利用に関する第1回会議開かれ、大
場が出席した。近くODPの掘削船による海底コア
を得て、各国が利用しようとしている。

3. 審議

- a. 平成6年度国際会議代表派遣について
本年度は本研連から選出される可能性は薄く、太
田委員長を除く他の委員からの申し出はなかった
か、候補推薦の提出期日が追っていることから、
委員長に一任することとした。
- b. 研連の活動について
第四紀中・長期計画に関するアンケートに基づく
研連の活動に関して、次の項目につき検討した。
- 1) INQUA各種研究委員会の一覧リスト（太田）
：INQUA本部から取り寄せたので、第四紀学会に
提供する。
- 2) INQUA要覧の作成（太田）実行予定である。
- 3) 日本人による海外の第四紀研究の実績一覧（遠
藤・小池）：海外学術調査に関する総合調査研究
班作成の研究者名簿と文献目録（昭和60年度ま
で）があり、これを利用する方法がある。ただし、
文部省の海外学術調査に限られていること、最
新の情報について不明なこと、時代・方法・標
本・キーワードなどの情報も必要であろう等の問
題があり、新たな調査、データベース作成には費
用もかかることから、具体化に向けては、さらに
第四紀学会の意向も聞くなどして進めることとし
た。
- 4) 第四紀関係科学研究費の実績調査（酒井）：第
四紀地質学、地形学を中心に過去3年間の実績につ
いて調べてみたが、考古、人類、土壌、工学関係
や重点配分等を含めると、かなりの数に上ること
が予想され、第四紀学会会員への情報提供の方法
については、さらに検討することとした。
- 5) 研連としては今期のうちに再度講演会を企画す
ることを確認、次回委員会には実現可能のテー
マを検討するために各委員が持ち寄ることとした。
- c. その他
次回委員会は1994年4月9日（土）13時30分～17時に
日本大学（予定）において開催する。

第四紀研究連絡委員会から

■第15期第9回会議議事録

日時：平成6年4月9日（土）13時30分～17時

場所：日本大学文理学部本館1階会議室B

出席者：太田委員長、新藤会員、遠藤、大場、菊地、熊井、小池、酒井、鎮西、永塚、町田、米倉
前回議事録を承認した。

報告事項

1. 日本学術会議関係報告（新藤会員）

1) 連合部会（2月18～19日）の報告

(1) 数理科学国際研究所の設立勧告案原案（第4部提案）が了承された。

(2) 公的機関の保有する情報の学術的利用案（第5常置委員会より）についての要望案が了承された。

(3) 「東京一極集中問題について」、「資源廃棄物問題について」「巨大技術システムと人間—安全性確保と人間性尊重」などが対外報告として提出される予定。

(4) 古生物研連からの自然史科学振興に関する研連報告

(5) 「我が国における学術団体の現状」（第4常置委員会の調査報告）が紹介された。

(6) 国際対応委員会の改組について検討中であることが紹介された。

2) 第4部会報告

(1) 平成6年度国際会議代表派遣については古生物研連を第1位、地質学研連を第2位として推薦することとした。

(2) 学術会議主催の公開講座の募集について

(3) 平成8年度共同主催国際会議について6件の申請があった。

2. 地質科学総合研連（2月21日）の報告（新藤会員）

1) 第15期の研連活動報告を準備中である。

2) 地質科学の普及のために、公開講座や普及書の刊行などを検討した。

3) 地球科学関係教室に、学科再編成や社会への貢献などについて、アンケート調査を行なうことにした。

4) 地質科学関連学協会連絡会の設立を新藤会員が提案した。

3. 第16期研連委員の選出について（太田委員長）

第1常置委員長から研連委員長宛に研連委員の任期について、3期9年を上限とすること、3つ以上の研連委員を兼ねないこと、例外条項について検討中であることなどが通知された。

4. 古地震シンポジウムの報告書（太田委員長）

今年中に刊行される予定であること

5. IGCP367について（太田委員長）

上記研究計画（Late Quaternary Coastal Rapid Change…）が1994年から5年計画で開始された。

6. IGBP（遠藤、大場委員）

IGBPニュース第5号が刊行されたこと、PAGES小委員会が発足したこと、炭素循環、古海洋環境に関する国際シンポジウムが11月14～17日に北大で開催される予定であることなどが報告された。

7. INQUA国際研究集会（町田委員）

2月7日から2週間、ニュージーランドにおいて、テフラ、レス、古土壌研究委員会主催の研究集会が開催され、65人（日本人は14人）が参加したことが報告された。

8. 日本第四紀学会1994年大会について（菊地委員）
8月26～30日に東京都立大学で開催される予定。

9. 日本第四紀学会テフラ研究委員会の野外研究集会について（町田委員）

6月26～28日に北海道で開催される予定（ニュースレターが配付された）。

10. 自然史科学の振興について（鎮西委員）

古生物研連から呼びかけで、5月20日（金）午後日本学術会議で打ち合わせ会が行なわれる予定。

審議事項

1. 学術会議総会への報告と提案について

1) 16期研連委員の任期についての通知に関連して理由を明らかにするよう求めることにした。

2) 国際会議派遣やシンポジウム開催費用を増額することを要望することにした。

2. "Quaternary Perspective" の内容の要旨を「第四紀研究」に紹介することを学会側に要望し、具体的な方法については学会側に任せることとした。

3. 研連主催のシンポジウムの企画について

太田委員長から海岸環境に関連するシンポジウムを企画することが提案され、小池、大場、永塚、太田の4人を準備委員として選出した。次回に原案を提示することとした。

4. 次回研連の議題について

第四紀研究の中・長期計画の具体案について、今期のまとめと引き継ぎ事項について検討することとした。

次回の予定7月2日（土）13時30分から、日本大学にて、次々回を8月31日（水）13時30分から、学術会議にて行うこととした。

■第5期第10回会議議事録

日時：平成6年7月2日

場所：日本大学文理学部本館第1会議室

出席者：太田委員長，新藤会員，遠藤，大場，
菊地，小池，熊井，鎮西，永塚

1. 前回議事録を確認の上承認した。
2. 報告事項

1) 日本学術会議関係（新藤会員）

(1) 研連の改廃について

研連の統合，新設，名称変更が行われた。関連するものでは，地球環境研連（IGBP専門委員会，HDP専門委員会），国際学術協力事業研連（IGCP，STEP，DELP，WCRPの各専門委員会）が新設され，南極研連が極地研連に，土質基礎工学研連が地盤環境工学研連に名称変更された。

(2) ICSU関係研究連絡委員会等の意見交換会
標記会合が4月18日に開かれ，研連の整理，統合等について話し合われた。

(3) 平成8年度科研費時限付き分科細目の設定
第4部として「地圏環境システム」を提出することとした。

2) シンポジウムの主催について（太田委員長）

(1) 国際シンポジウム「熱帯・亜熱帯モンスーン
アジアの古環境変遷」国際対応IGBP専門委員会主催，
第四紀研連他共催で広島で行われる。

(1994年9月4-6日)

(2) 公開シンポジウム「日本列島における海岸環境
の変遷」日本第四紀学会と共催で，日本学術会議
において行われる（1994年11月25日）。

(プログラム等はp.3参照)

3) 「自然史学会連合」の準請会について

(太田委員長)

同準備会が1994年5月20日に開催された。

4) 平成8年度科研費時限付き分科細目の設定について（太田委員長）

前回に引き続き「地球環境システム」を申請。

5) アンケートの処理と関連する項目(太田委員長)

(1) Quaternary Perspectiveを第四紀研究に転載することについて，既に許可を得て，実施している。今後新しい号が出る度に転載する。

(2) INQUA要覧については6月末に部分改正がある見込みなので，それを入手後翻訳し，第四紀研究に掲載する。

(3) 科学研究費受領状況，海外研究実施状況について

科学研究費受領状況（担当酒井委員）については，地質関係：酒井，地球化学関係：大場，土壌関係：永塚，考古人類関係：小池が分担して進め

ること，海外研究実施状況（担当菊地委員）については引き続き調査を進めることになった。

(4) 次期INQUA大会に向けて（太田委員長）
第四紀研究に掲載された論文リスト（過去10年分）を印刷してINQUA大会で配布する案が検討された。

6) IGBP，PAGES関係（遠藤委員・大場委員）
第2回PAGES小委員会が5月20日に日本学術会議において開催され，PEPII Projectの北京集會（4月），IMAGESや他の関連研究の進行状況が報告され，今後のPEPIIへの取り組み等について議論された。PAGESに関連した国際シンポジウム「熱帯・亜熱帯モンスーンアジアの古環境変遷」（国際対応IGBP専門委員会主催・第四紀研連他共催）が9月に広島で開催される。また，来年度に小委員会としてPAGES国際集會開催を検討している。日本学術会議主催第3回IGBPシンポジウム「日本のIGBP研究の現状と将来」は平成6年2月8-9日に行われる。

3. 審議事項

1) 次期研連委員について

(1) 学術会議会長からの要請

次期研連委員の選出にあたって，女性科学者の選出を考慮してほしい旨の要請が学術会議会長からあった。

(2) 次期第四紀研連委員の選出母体について検討し，会員1，第四紀学会8，地形学連合1，地学団体研究会1，特別枠（第四紀研究上特に必要）2，合計13名を原案とし，地質科学総合研連の結果を踏まえて，会員，研連委員長より当該団体に依頼することになった。

(3) 地球環境研連，国際学術協力事業研連の委員について

新設の地球環境研連のIGBP専門委員会には大場委員を，国際学術協力事業研連のWCRP専門委員会には三上岳彦氏を推すこととした。

2) 平成7年度概算要求について

標記の件について，代表派遣についてはINQUAを第1位に推すこと，概算要求資料には平成7年度シンポジウム「第四紀の年代区分に関するシンポジウム」開催費用，INQUA要覧印刷費を計上することとした。

3) その他

議題として予定された第四紀中・長期計画，次期研連への申し送りについては次回検討することになった。

今回は8月31日13時より日本学術会議において開催される。

評議員会および総会議事録

1994年度第2回評議員会を1994年8月26日に東京都立大学で開催した(議長:辻誠一郎;出席者25名,委任状11通)。翌8月27日には,1994年度総会が同所で開催された(議長:菊地隆男;出席者94名,委任状121通)。評議員会および総会では,以下のような報告・審議が行われた。

I. 報告事項

1. 1993年度事業報告

1-1. 庶務

(1) 会員動向(1994年7月31日現在):正会員1,852名(うち学生会員76名,海外会員22名を含む),賛助会員13社(15口),団体会員98団体(102口)。

逝去会員は,田中豊俊,安藤一男,小杉正人,大上和良,巨理俊次,鈴木敬治,曾根賢治,間当治孝,木庭次守,尾崎博の10氏。

(2) 1993年度第2回評議員会を1994年1月22日東京都立大学で開催した。

(3) 学術会議第16期会員候補者(1名)との推薦人(2名)を評議員による投票で決定した。会員候補者は米倉伸之,推薦人は遠藤邦彦・菊地隆男の2氏,および推薦人予備者は上杉陽が選出された。推薦人会議(第4部・地質科学・地球科学総合研究連絡委員会,定数1)は1994年5月19日に開催され,新藤静夫氏が第16期会員として推薦された。

(4) 学術会議地質科学総合研究連絡委員会は,科学研究費補助金の分科「地球科学」の中の細目「地質学」に,審査委員(第1段審査)1名の推薦枠を有する。この推薦枠1名は,第四紀学会,応用地質学会,地下水学会,地形学連合,及び地熱学会の5学会から推薦された計5名の候補者の中から選ばれる。第四紀学会の推薦する候補者は,評議員による通信投票によって選出することとし,投票を行った。

(5) 第16期学術会議第四紀研究連絡委員会委員候補者(8名)を決定するために評議員による投票を行った。

(6) 1994年度文部省科学研究費刊行助成金の申請を行った(今年度の内定額:66万円)。

(7) 以下のシンポジウム,講習会について協賛/後援学会となることを承諾した:

○丘陵地域の応用地質学的特性と課題に関するシンポジウム

主催:日本応用地質学会関西支部

日時:1993年11月29日

場所:大阪市立大学・田中記念ホール

○地球化学研究協会第30回講座・

自然科学の第一線 IX

主催:地球化学研究協会

日時:1993年11月29日

場所:東海大学交友会館

(霞が関ビル33階,東京都千代田区霞が関3-2-5)
○第10回ESR応用計測研究会—イメージングの手法の発展と学際領域への応用—

主催:ESR応用計測研究会

日時:1994年6月17,18日

場所:大阪大学基礎工学部・シグマホール

○火山工学シンポジウム

—火山工学の確立を目指して—

主催:土木学会

日時:1994年7月21日

場所:コクヨホール(東京都港区港南1-8-35)

○君津市国際地球環境フォーラム

主催:君津市

日時:1994年8月17日

場所:君津市市民文化ホール

○国際シンポジウム「リオからの道—地質環境・地球環境をめぐる持続可能な開発—」

主催:日本地質学会環境地質研究委員会

日時:1994年8月18-19日

場所:経団連ホール

(東京都大手町,経団連会館)

1-2. 編集

(1) 「第四紀研究」32巻4号,5号,33巻1号,2号,3号を編集・刊行した。このうち,32巻5号は特集号「災害とその予測—第四紀研究のはたす役割—」(編集委員長:小池一之,論文16篇)である。特集号を除き,刊行された論文等の数は,原著論文10篇,短報6篇,講座1篇,解説1篇,資料2篇である。93年度の刊行総頁数は390頁(但し,32巻の総頁数は372頁)である。頁数の減少は,33巻から学会記事など一部の内容が新刊の「ニューズレター」に移行したためである。なお,32巻4号の特集号「災害とその予測—第四紀研究のはたす役割—」は,原稿の投稿および編集作業が遅れたため,刊行を5号に変更した。また,33巻4号の掲載論文はすでに受理を決定しているものがある(原著論文3篇,短報2篇),ほかに原著論文6篇,短報4篇を審査中である。最近,投稿論文が少ないので,会員諸氏からの論文投稿をお願いする。

(2) 講座「海産パリノモルフ化石とその研究の現状」を掲載することができた。今後ともこのような講座を継続して,最近の研究の先端を紹介し

たい。

(3) 現在、印刷所との間ですべての論文をフロッピー入校できないかどうかを検討中である。印刷所の体制ができしだい、投稿規定・執筆要領などの改訂を提案したい。

(4) 最近、いつも特集号の刊行が遅れるので、この編集作業を通常号の編集委員会が担当できないか検討中であり、試行段階として、33巻の特集号の編集を途中から通常号の編集委員会が分担している。本来なら、シンポジウムが終わった段階で、編集計画が立てられなければならないが、従来、この立ち上がりが遅れている。

1-3. 行事

(1) 1993年度大会(総会・シンポジウム・一般研究発表会・巡検・懇親会)を福岡市博物館において1993年8月27日～31日に開催した。シンポジウムのテーマは「東アジアと日本の遺跡をめぐる古環境」(話題提供10, コメント5; オーガナイザー: 海津正倫・磯望・高倉洋彰)。一般研究発表54件, ポスターセッション6件。8月30～31日の巡検は「北部九州沿岸の弥生時代文化と自然環境」(案内者: 杉山富雄・下山正一)。

(2) 日本第四紀学会講演会「モンスーンアジアの古水文変動の復元に向けて」を、1994年1月22日に東京都立大学理工教室棟大講義室において開催した。講演者とタイトルは以下のとおり:

門村 浩 : 古水文変動の復元に向けて

田村俊和・宮城豊彦・小岩直人: モンスーンアジアの古水文環境復元への斜面堆積物の活用

小野有五 : 氷河・周氷河地形からみたモンスーンアジアの古水文環境

須貝俊彦 : 段丘堆積物による古水文環境復元

小口 高 : 移動土砂量による古水文環境復元

(3) 博物館見学会を、兵庫県立人と自然の博物館において、1994年6月12日に開催した。

(4) 1994年度大会の準備を行った。1994年8月26日～30日に東京都立大学において開催する。

大会準備委員長: 町田 洋

日程: 26日 一般研究発表・ポスターセッション; 27日 一般研究発表・ポスターセッション・総会・懇親会; 28日 シンポジウム「高精度年代測定と第四紀研究」(発表12, オーガナイザー: 町田 洋・大村明雄; 29～30日 巡検「伊豆半島北端部プレート衝突域の第四紀地史」(案内者: 山崎晴雄・町田 洋・水野清秀)

(5) 公開シンポジウム「日本列島における海岸環境の変遷」(第四紀研連との共催)の準備を行った。1994年11月25日に日本学術会議講堂において

開催する。

1-4. 企画

(1) 幹事会の継続検討課題となっている「テフラ標準土層集」の企画について、関係者の意見を集めて再検討した結果、「日本列島第四紀重要露頭集—その1—」として刊行する方針を決め、内容、編集組織、出版方式等について検討した。

(2) 94年度より第四紀学会講習会を実施することを93年度第2回評議員会に諮り、承認を得た。これを受けて変動地形の研究方法をテーマとする第1回講習会の開催を企画し、参加者の募集等の準備を行った。

(3) 本会創立40周年を契機に学会賞創設に向けて検討を進めることを93年度第2回評議員会に諮り、承認を得た。これを受けて幹事会で学会賞の内容、受賞者の選考方法等について検討を重ね、学会賞規定(案)等を作成した。

1-5. 会報

(1) 会報検討委員会(小池会報担当幹事, 池田・熊木・斎藤・杉山各委員)において、1993年9月18日と11月13日の2回会合を開き、会報の名称・体裁・掲載内容・刊行スケジュール等を検討し、前回評議員会に原案を提示した。

(2) 会報の名称を「第四紀通信QR Newsletter」とし、Vol.1, No.1 (1994年1月, 8p), Vol.1, No.2 (1994年4月, 16p)を刊行した。編集書記として鹿島 薫氏をお願いし、Vol.1, No.3 (1994年7月, 20p)の発刊準備を行った。

1-6. 渉外・国際

(1) 国際会議の開催予定を「第四紀研究」から新刊の「ニュースレター」に移して継続的に掲載している。

(2) 「第四紀研究」掲載の原著論文の要約を「The East Asian T/Q Newsletter」に投稿し掲載している。

(3) US Department of Interior 構築の「Wetland Values Database」に関連する論文要約を収録することを了承した。

(4) INQUA コミッションに対応する以下の研究委員会が活動を継続中である。

テフラ研究委員会(委員長: 町田 洋)

INQUA/GLOCOPH対応研究委員会

(委員長: 門村 浩)

海岸線研究委員会(委員長: 太田陽子)

応用第四紀研究委員会(委員長: 太田陽子)

上・中・下部更新統境界に関する研究委員会(委員長: 熊井久雄)

学会からのお知らせ

2. 1992年度決算報告・会計監査報告

別紙資料参照

3. 研究委員会報告

3-1. テフラ研究委員会(委員長:町田 洋)

今年度は次の二つの活動を行った。なお、1994年度も引き続き研究委員会活動の継続を希望する。

(1) IGBP-PAGES/INQUA-COT関連国際集会

1994.12.1-4

テーマ・目的: 爆発的火山噴火がグローバルな気候に与える影響

場所: 明治大学(討論会), および浅間・榛名火山

参加者: 35-40名(討論会), 27名(野外巡検)

組織委員: 町田 洋, 遠藤邦彦, 三上岳彦, 奥村晃史, 杉原重夫, J. Beget,

早川由紀夫, 早田 勉, 新井房夫

印刷物: 講演要旨, 巡検案内(いずれも英文)

(2) 北海道野外集会 1994.6.26-28

テーマ: 広域テフラと北海道の第四紀編年

場所: 北海道石狩平野南部—十勝平野—道東

参加者: 41名

案内者: 町田 洋, 奥村晃史, 山縣耕太郎

印刷物: 案内書

3-2. 上・中・下部更新統境界に関する研究委員会(委員長:熊井久雄)

本研究委員会は北京 INQUA大会で提案された中/下部更新統の模式地候補地である千葉県養老川セクションについて国内での検討を主とし、合わせて上/中部更新統模式地についても考えて行こうと組織された研究委員会である。当面の具体的課題としては、一昨年夏の千葉での INQUA更新統の区分に関する小委員会の千葉での中/下部更新統境界に関する現地検討会を受けて、そのおりに宿題として提案された諸課題について国内研究者で研究分担して、総合して行こうというものである。

本年度の主な活動は、去る7月9・10日に養老川の中/下部更新統境界候補地点での現地討論会を実施した。参加者は30名で、現在までの研究結果についての総合化に関する討論と、追加すべき分析用の試料採取を行なった。合わせて、INQUA更新統の区分に関する小委員会委員長からの要請に答えて、ベルリン大会での中/下部更新統境界シンポジウム話題提供予定者の推薦を行なった。ベルリンでのシンポジウムは半日を予定している。

ベルリン大会で日本に模式地を設定できるように来年度も引き続きこの研究委員会の活動を継続したいので、そのようにお取り計らい頂きたい。

3-3. INQUA/GLOCOPH対応研究委員会(委員長:門村 浩)

(1) 活動経過

1. 日本第四紀学会講演会「モンスーンアジアの古水文変動の復元に向けて」

(1994.1.22; 於東京都立大学)をIGBP-PAGES国内委員会と共催し、約70名の参加を得て次の研究発表と討論を行った。

田村俊和(東北大)・宮城豊彦(東北学院大)・小岩直人(東北大): モンスーンアジアの古水文環境変動復元への斜面堆積物の活用

小野有吾・平川一臣・白岩孝行(北大): 氷河・周氷河地形から見たモンスーンアジアの古水文環境

須貝俊彦(東大): 河成段丘堆積物による古水文環境復元

小口 高(東大): 移動土砂量による古水文環境復元

2. 昨年度実施した研究分野・地域、関心のある分科会・WG、主な関連研究成果等に関するアンケートの結果(回収約32名)を一覧表に整理した。この結果はサーキュラーNo.3の主体として本年10月までに印刷公表の予定。

3. INQUA/GLOCOPH '94—地球大陸古水文国際会議(1994.9.10-17; イギリス・サウザンプトン)への参加を呼びかけ、小口・門村ほか参加し研究発表することになった。

(2) 来年度の活動について

次年度も委員会を設けて引き続き活動することを希望する。次の活動を予定している。

1. 研究委員会の開催 2回(10月および3月頃)

2. サーキュラーの発行 2回(講演会・研究会報告, 討論概要, アンケート結果一覧表, INQUA/GLOCOPH '94報告などを中心に)

3. 講演会発表論文・討論内容の印刷配付

4. INQUA '95—Berlinへ向けての準備

(3) 会計報告

学会より受領の活動費 40,000円

1994.8.10までの支出額 23,500円(コピーカード10,000円, 切手代13,500円)

1994.8.10現在の残額 16,500円(講演会発表論文・討論内容刊行のための積み立て)

3-4. 応用第四紀研究委員会(委員長:太田陽子)

参加者名簿を整備し、近日中にニュースレターを発行する。1993年に実施したシンポジウム「古地震を探る」を単行本として出版するために準備中である。次年度も委員会を設けて引き続き活動することを希望する。

3-5. 海岸線研究委員会(委員長:太田陽子)ニュースレター(1)を発行した。(2)は準備中である。1994年11月に実施のシンポジウム「日本列島の海岸環境の変遷」の企画・準備に協力した。次年度も委員会を設けて引き続き活動することを希望する。

4. 日本学術会議・第四紀研連報告

(別報参照)

II. 審議事項

1. 1994年度事業計画

1-1. 庶務

- (1) 内規集の整備を進める。
- (2) 学会受け入れ図書の整理を進め、寄贈先につき、再検討する。
- (3) 1994年度において活動を希望する研究委員会を内定し評議員会に諮る。
- (4) 選挙管理委員会を組織し、役員改選を行う。
- (5) 会員名簿を作成する。

1-2. 編集

- (1) 「第四紀研究」33巻4号, 5号, 34巻1号, 2号, 3号を編集・刊行する。
- (2) 投稿規定・執筆要領などの改訂を検討する。

1-3. 行事

- (1) 1994年度大会を都立大学において開催する。
- (2) 1995年1月中～下旬に講演会を企画する。
- (3) 1995年度大会の準備を行う。新潟において、1995年8月下旬、開催の予定(開催側責任者:小林巖雄会員)。シンポジウムのテーマは検討中。
- (4) 第四紀研連、研究委員会、他学会・他研連、地域博物館などと協力し、ミニシンポジウム・講演会等を企画する。

1-4. 企画

- (1) 「日本列島第四紀重要露頭集-その1-」の刊行に向けて、編集作業を進める。

※日本列島の第四紀自然環境の変遷は、テフラ層序学の発展と様々な手法による年代測定値の蓄積等により、近年飛躍的に緻密化され、グローバルな環境変動の中に細かく位置づけることが可能になりつつある。今後日本列島では、様々な研究手法・観点による国内及び国際的な共同研究が盛

んになるであろう。一方、今日の日本では、第四紀層露頭の多くは人工露頭であるため、消滅が激しく、数年もすると重要な模式露頭での観察・試料採取が不可能となる。

本学会では、様々な分野のできるだけ多くの研究者に層序学的に確実な基礎データを提供し、同時に重要露頭の消滅という喫緊の問題に対処するため、創立40周年記念企画の一つとして、「日本列島第四紀重要露頭集-その1-」を刊行する。

本露頭集には列島各地のテフラ模式露頭をはじめ、断層露頭、化石産出露頭等の第四紀の研究に重要な露頭を簡明な説明文と共に収録し、「第四紀研究」の特集号として出版する。編集委員には池田安隆、上杉 陽、遠藤邦彦、貝塚爽平、熊井久雄、町田 洋の各会員を予定している。

(2) 第1回第四紀学会講習会(変動地形の研究手法～阿寺断層)を8月17～19日に岐阜県坂下町で開催する。応募者は53名、宿泊施設の制約のため抽選による31名が参加し、阿寺断層を題材として変動地形の野外及び室内における研究方法を講習する。講師は佃栄吉、栗田泰夫両会員に依頼した。

(3) 古生態学調査方に関する講習会を1994年12月に開催する(世話人:小池裕子・遠藤邦彦)。

1-5. 会報

「第四紀通信」のVol.1, No.3(1994年7月, 20p), Vol.1, No.4(12月, 20p), Vol.2, No.1(1995年1月, 20p), Vol.2, No.2(1995年4月, 24p)を刊行し掲載内容の充実をはかる。

2. 第16期日本学術会議第四紀研連委員の推薦について

日本学術会議第16期の第四紀研連委員(8名)および古生物研連委員(1名)候補者を評議員による予備投票の結果に基づいて決定する。

3. 会則および幹事会内規の一部改訂

3-1. 評議員選挙に関する会則と選挙規定の改訂

1992年度選挙管理委員会(委員長:熊木洋太)から選挙規定第16条(共通分野と専門分野の票の合算問題)、同第26条4項(重複投票の禁止)、同第10条(会長経験者に選挙権がない?)につき、改正提案があった。これについて、以下の改正案を提案する。なお、下記の(2)および(3)は1993年度第2回評議員会(1994年1月22日)ですでに承認済みである。

- (1) 会則第10条(下線部は変更箇所)

[現行] 評議員は正会員(ただし会長経験者

学会からのお知らせ

を除く)の中から互選される。

〔改正案〕評議員は正会員の中から選出される。ただし会長経験者は被選挙権を有しない。

(2) 選挙規定第16条(下線部は変更箇所)

〔現行〕評議員選出の投票は各専門分野より定数名、共通分野より5名の連記とする。まず、共通分野の得票数の順序にしたがい、共通分野の評議員を決定する。その後、共通分野に選出された者を除き、専門分野ごとの得票数の順序により専門分野の評議員を決定する。(以下略)

〔改正案〕評議員選出の投票は各専門分野より定数名、共通分野より5名の連記とする。まず、共通分野の得票数の順序にしたがい、共通分野の評議員を決定する。その後、共通分野に選出された者を除き、専門分野の得票数と共通分野の得票数の合計数の順序により専門分野の評議員を決定する。(以下略)

(3) 選挙規定第26条第4項(下線部は変更箇所)

〔現行〕評議員選挙で第17条に抵触した場合は、専門分野に関する投票を優先して1票のみを有効とする。

〔改正案〕評議員選挙で第17条に抵触した場合は、共通分野に関する投票を優先して1票のみを有効とする。

3-2. 紙碑等の基準に関する内規
紙碑等の基準(案)

対象会員	弔辞等	紙碑
1 会長経験者	生花・会長弔辞	追悼文* (600-1200字程度) 遺影を付ける
2 評議員・旧評議員	生花	追悼文* (400-800字程度)
3 その他の全会員	弔電	訃報**

*依頼原稿とする。

**定型の訃報文とする。

3-3. 学会賞の創設について

本学会に学会賞(論文賞)を創設し、これに係わる「日本第四紀学会学会賞規定」並びに「日本第四紀学会論文賞選考に関する内規」を設ける。

※最近、本学会にも早急に学会賞を新設せよとの要望が数多く寄せられているため、昨年11月の幹事会で本会創立40周年を契機に学会賞創設を検討することを決めた。幹事会では学会賞の素案を作成し、1月に開催された93年度第2回評議員会に提案した。評議員会では学会賞の内容や選考方法等について活発な議論が行われ、学会賞を創設する方向で幹事会でさらに検討を進めることが承認された。幹事会ではこれを受けて、学会賞の内容、受賞者の選考方法等について検討を重ね、学会賞規定案と内規案を作成した。さらに、評議員から学会賞規定案と内規案についての意見を集め、改めて検討を行い、学会賞規定案と内規案を決定した。

4. 1994年度予算案(別紙資料参照)

5. その他の審議事項

自然史学会連合および地球惑星科学関連学会合同大会への参加が提案され、承認を得た。

予稿集・雑誌(残部)返送のお願い

第四紀学会の大会開催に関しましては、多くの方々の御協力をいただきまいました。その際には、予稿集・第四紀研究(バックナンバー)を販売していただきました。現在でもその時の予稿集や雑誌等の残部が手元にある方は、下記の発送先までお送りいただけますよう、よろしく願いいたします。なお、発送に要した、費用につきましては、下記の会計までご請求下されば、おって送金いたします。請求のさいには、金融機関の振り込み先を添えていただきますようお願い申し上げます。

発送先: 〒402都留市田原3-8-1都留文科大学地学研究室上杉陽あて TEL 0554-43-4341

会計: 〒183府中市幸町3-5-8東京農工大学農学部 坂上寛一あて TEL 0423-34-5968

(行事担当幹事)

資料(1) 1993年度収支決算報告書 (1993年8月1日～1994年7月31日)

収入の部

科目	予算額	決算額	増減	備考
会費	13,171,500	13,171,300	△ 34,200	
正会員	11,970,500	11,769,800		海外会費 128,800
団体会員	921,500	1,067,500		過年度分 430,000
賛助会員	280,000	300,000		
誌代	1,500,000	1,564,085	64,085	
補助金収入	590,000	590,000	0	文部省科研費補助金
雑収入	600,000	263,596	△ 336,404	超過頁代・広告料
利子収入	500,000	319,906	△ 180,094	
役員選挙積立金取崩	0	0	0	
名簿積立金取崩	0	0	0	
特別事業積立金取崩	200,000	200,000	0	
INQUA 積立金取崩	0	0	0	
収入合計	16,561,500	16,074,887	△ 486,613	
前期繰越金	1,708,428	1,708,428		
合計	18,269,928	17,783,315	△ 486,613	

支出の部

科目	予算額	決算額	増減	備考
会誌発行費	7,950,000	7,110,018	839,982	第四紀研究5冊 374p
印刷費	6,300,000	5,313,049		32巻3号～33巻2号
編集費	1,500,000	1,580,771		第四紀通信2通 20p
別刷印刷費	150,000	216,198		1巻1号～1巻2号
会誌発送費	1,000,000	901,194	98,806	
大会運営準備金	400,000	400,000	0	1994年用
巡検準備金	100,000	100,000	0	1994年用
特別講演会費	300,000	220,585	79,415	
予稿集印刷費	450,000	348,000	102,000	
通信費	400,000	466,423	△ 66,423	
会議費	120,000	3,300	116,700	
旅費・交通費	500,000	245,000	255,000	
印刷費	150,000	109,438	40,562	
業務委託費	3,000,000	3,233,499	△ 233,499	資料(4) 参照
特別刊行物企画編集	0	0	0	
INQUA 対策費	0	0	0	
役員選挙費	0	0	0	
名簿作成費	0	0	0	
名簿発送費	0	0	0	
特別事業積立金	500,000	500,000	0	
INQUA 対策積立金	200,000	200,000	0	
役員選挙費積立金	200,000	200,000	0	
予備費積立金	0	0	0	
名簿作成積立金	600,000	600,000	0	
研究委員会助成金	200,000	200,000	0	
雑費	100,000	200,770	△ 100,770	
予備費	100,000	0	100,000	
支出合計	16,270,000	15,038,227	1,231,773	
次期繰越金	1,999,928	2,745,088	△ 745,160	
合計	18,269,928	17,783,315	468,613	

資料(2) 1994年度予算案 (1994年8月1日～1995年7月31日)

収入の部

科目	1994年予算案	1994年決算額	1993年予算案	備考
会費	13,440,400	13,137,300	13,171,500	7000円×1776名×95%+
正会員	12,171,400	11,769,800	11,970,000	5000円×76名×95%
団体会員	969,000	1,067,500	921,500	10,000×102口×95%
賛助会員	300,000	300,000	280,000	20,000×15口
誌代	1,500,000	1,564,085	1,500,000	バックナンバー・予稿集
補助金収入	660,000	590,000	590,000	文部省科研費補助金
雑収入	800,000	263,596	600,000	広告等
利子収入	250,000	319,906	500,000	
役員選挙積立金取崩	400,000	0	0	
名簿積立金取崩	1,000,000	0	0	
特別事業積立金取崩	300,000	200,000	200,000	
INQUA 積立金取崩	100,000	0	0	
収入合計	18,450,400	16,074,887	16,561,500	
前期繰越金	1,745,088	1,708,428	1,708,428	
合計	21,195,488	17,783,315	18,269,928	

支出の部

科目	1994年予算案	1994年決算額	1993年予算案	備考
会誌発行費	7,400,000	7,110,018	7,950,000	第四紀研究5冊
印刷費	5,700,000	5,313,049	6,300,000	
編集費	1,500,000	1,580,771	1,500,000	
別刷印刷費	150,000	216,198	150,000	
会誌発送費	700,000	901,194	1,000,000	
会報発行費	500,000	0	0	第四紀通信4通
会報発送費	500,000	0	0	
大会運営準備金	400,000	400,000	400,000	1995年用
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	1995年用
特別講演会費	250,000	220,585	300,000	
予稿集印刷費	450,000	348,000	450,000	
学会賞費	0	0	0	
第四紀学会講習会費	100,000	0	0	
通信費	500,000	466,423	400,000	
会議費	50,000	3,300	120,000	
旅費・交通費	300,000	245,000	500,000	
印刷費	150,000	109,438	150,000	
業務委託費	3,700,000	3,233,499	3,000,000	資料(5)参照
40周年記念特別刊行物企画編集	200,000	0	0	
INQUA 対策費	100,000	0	0	
役員選挙費	400,000	0	0	
名簿作成費	1,100,000	0	0	
名簿発送費	600,000	0	0	
特別事業積立金	500,000	500,000	500,000	40周年記念事業
INQUA 対策積立金	200,000	200,000	200,000	
役員選挙費積立金	200,000	200,000	200,000	
予備費積立金	0	0	0	
名簿作成積立金	0	600,000	600,000	
研究委員会助成金	200,000	200,000	200,000	40,000×5件
雑費	100,000	200,770	100,000	
予備費	100,000	0	100,000	
支出合計	18,800,000	15,038,227	16,270,000	
次期繰越金	2,395,488	2,745,088	1,999,928	
合計	21,195,488	17,783,315	18,269,928	

資料(3) 貸借対照表 (1994年7月31日現在)

貸方		借方	
科目	金額	科目	金額
流動資産		流動負債	
預け金	1,171,743	仮受金	100
小口現金	230,413	前受会費	7,962,000
普通預金	127,106	積立金	6,550,000
定期預金	0	小計	14,512,100
金銭信託	11,550,000		
貸付信託	4,000,000	前期繰越金	1,708,428
仮払金	50,000	当年度余剰金	1,036,660
前払費用	127,926	(次期繰越金)計	2,745,088
合計	17,257,188	合計	17,257,1

財産目録

資産の部			負債の部		
科目	摘要	金額	科目	摘要	金額
預け金	日本学会事務センター	1,171,743	仮受金		100
小口現金	編集 74,475 会計 154,938	230,413	前受会費	1994年度会費	7,962,000
普通預金	三井信託/上野支店	127,106	積立金	特別事業費積立 1,500,000	6,550,000
定期預金	同上	0		INQUA積立 600,000	
金銭信託	同上	11,550,000		予備費積立 3,250,000	
貸付信託	同上	4,000,000		名簿積立 1,000,000	
仮払金	講習会行使謝礼・バス借上	50,000		役員選挙積立 200,000	
前払費用	第四紀通信1巻3号印刷代	127,926			
合計		17,257,188	合計		14,512,100

資料(4) 日本第四紀学会1993年度業務委託費 (1993年8月1日～1994年7月31日)

I 会員業務費用	2,351,320	
1. 会員管理費	180,000	
2. 会費請求・学会誌等送付費用(7回)	1,706,100	2068件×825円
3. 新入会員登録手数料	69,300	99件×700円
4. 住所等変更手数料	135,000	225件×600円
5. 特別請求書発行手数料	151,400	97件×1200円; 35件×1000円
6. 追加発送手数料	45,900	459件×100円
7. 多部発送手数料	1,220	4件×305円
8. 学会誌保管費用	62,440	4段×15,600円
II 受付業務費用	320,000	
III 会計業務費用	468,000	
賞費税 3%	94,179	
合計	3,233,499	

資料(5) 日本第四紀学会1994年度業務委託費見積 (1994年8月1日～1995年7月31日)

I 会員業務費用	2,770,620	
1. 会員管理費	180,000	
2. 会費請求・学会誌等送付費用(7回)	2,100,000	2100件×1000円
3. 新入会員登録手数料	70,000	100件×700円
4. 住所等変更手数料	150,000	250件×600円
5. 特別請求書発行手数料	151,400	97件×1200円; 35件×1000円
6. 追加発送手数料	46,000	460件×100円
7. 多部発送手数料	1,220	4件×305円
8. 学会誌保管費用	72,000	4段×18,000円
II 受付業務費用	320,000	
III 会計業務費用	468,000	
賞費税 3%	106,758	
合計	3,665,378	

第2回第四紀学会講習会のお知らせ

第2回日本第四紀学会講習会を下記の日程で実施します。古生態学の研究方法論に関心をお持ちの学生・院生・一般社会人の方々の積極的な参加をお待ちしております。

1. テーマ：古生態学研究方法論
2. 開催地：東京湾東岸小櫃川河口干潟および千葉市中央博物館
3. 日程：1995年3月18日(土)～19日(日)（1泊2日）
4. 内容：小櫃川河口干潟にて植物相・動物相を観察しながら、バイオマスなどの現生生態学調査法および珪藻・花粉・植物珪酸体・安定同位体などのサンプル採取法を実習する。
翌日千葉市中央博物館にて調査分析における問題点などを討論する。
5. 募集人数：25人程度(応募者多数の場合は抽選を行います)
6. 参加費：10,000円の予定(宿泊代・昼食代など)
7. 講師：小池裕子・鹿島 薫(九州大学)

参加を希望される方は、はがきに氏名・年令・性別・所属・連絡先を明記して、下記の企画担当幹事宛、お申し込み下さい。(申し込み締切り：1月31日)

申し込み先：〒305 つくば市東1-1-3 地質調査所環境地質部 杉山雄一
TEL 0298-54-3694, FAX 0298-54-3533,52-3461

■「第四紀通信」編集事務局の変更について

日本第四紀学会の会報「第四紀通信QRNewsletter」の担当幹事の転勤にともない、会報原稿の連絡先が下記に変更になりましたのでお知らせいたします。またVol.1、No.3から編集書記として九州大学の 鹿島 薫さんのご協力をいただいております。

会報の編集にはMacintoshのPagemakerを使い、手作りで行っております。従いまして原稿はできるだけフロッピーでいただくか、あるいは電子メールでお送り下さい。フロッピーディスクはMS-DOSまたはMacフォーマットで、できるだけテキストファイルの形式にして下さい。3.5インチ、5インチの両方が使えます。また、万一のため打ち出した原稿も同封して下さい。

今後もどしどし第四紀関連情報をお送りいただきますようお願いいたします。

次号の締め切りは1994年12月10日です。

記

〒810 福岡市中央区六本松4-2-1 九州大学大学院比較社会文化研究科 小池裕子
TEL&FAX 092-716-6892

電子メール：koikegsc@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

kashima@geo.kyushu-u.ac.jp

Nifty-serve I D : H G B 03015